



つがるの昔っこ (昔話) ⑥

お松の歌詠み

(標準語)



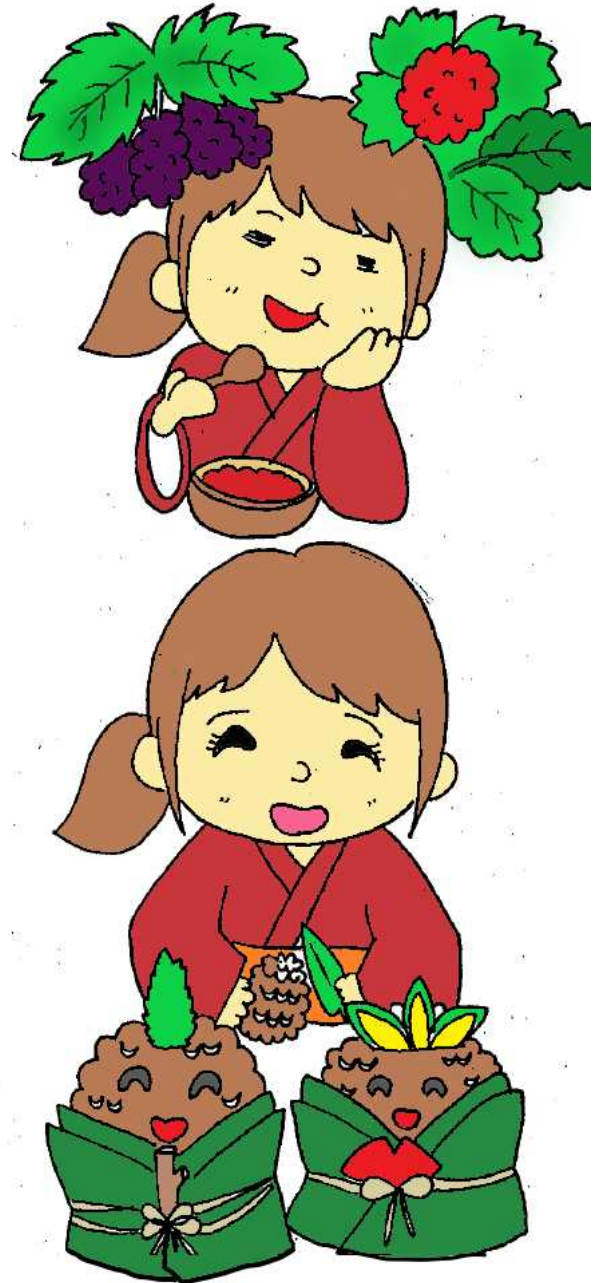
国土交通省 東北地方整備局
岩木川ダム統合管理事務所
イラスト：やざわ ゆな
カラーリング：つしま けいこ

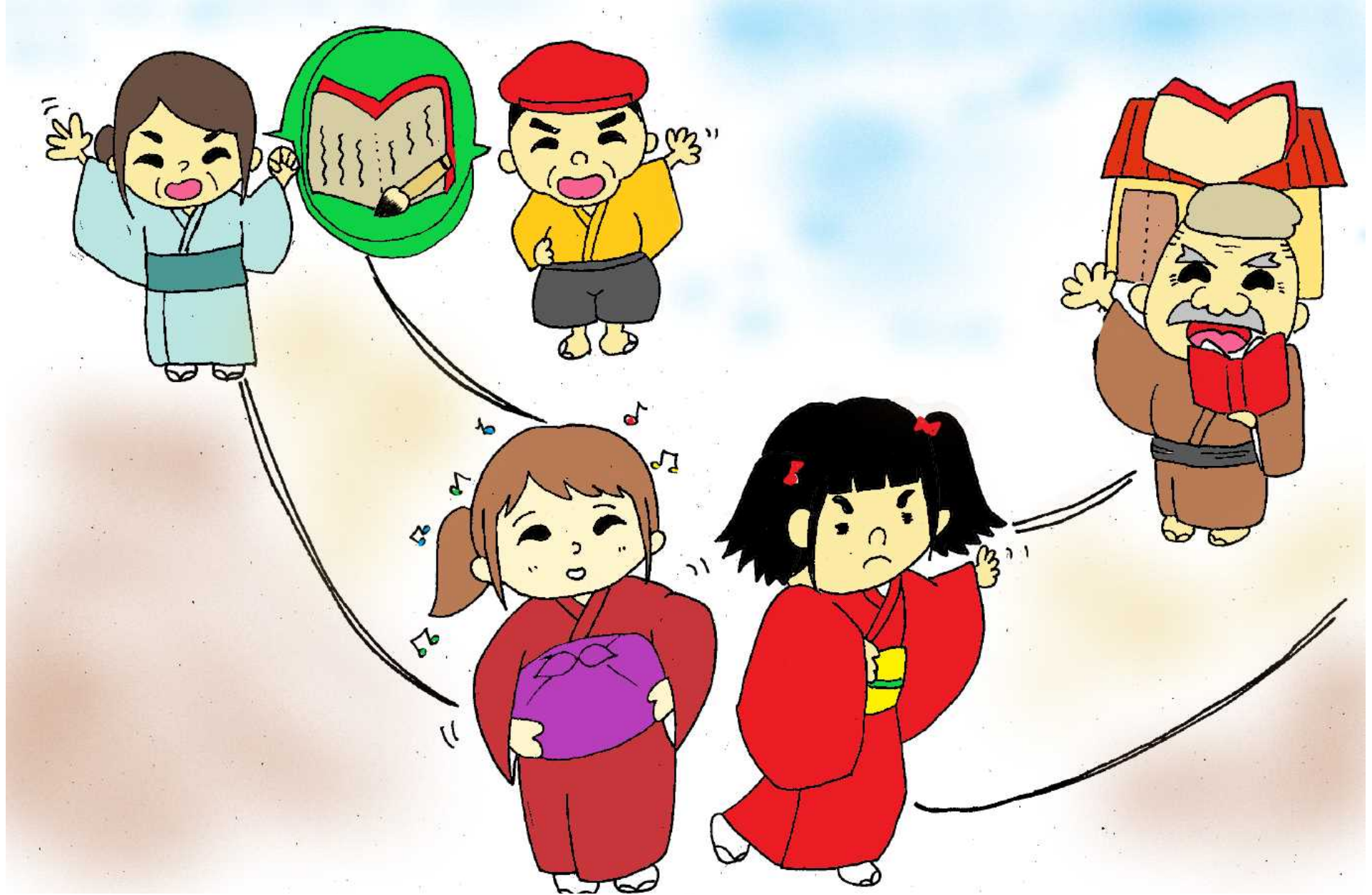
昔々ある家にほんとうの子供と、ママ子が居りました。ほんとうの子の名前はお絹といって、ママこ子は始めはちゃんとした名前がりましたが、誰も本当の名前を呼ばないでただ、捨て、捨てと呼んでいました。

親たちは、本当の子のお絹には、毎日うまいものを食べさせて、いい着物を着せ、真綿にくるむように大事にしていたが、ママ子の捨てはいつも皆の食い残しのご飯と古着を着せられ、毎日毎日、朝早くから夜遅くまで働かされていました。



お絹は、小さい頃からお菓子といえばお菓子、玩具（おもちゃ）といえば玩具、欲しいもの何でも買って貰っていましたが、捨ては桑の実や野いちごを食べて、松ぼっくりの人形に笹の葉の着物を着せて遊んでいました。それでも根が丈夫な子どもだったようで、お絹がいつも熱を出したり、風邪引いたりしているのに、捨ては病気一つせず育ち、この娘達は二人共、十歳になりました。





十歳になった時、お絹に学問を身につけてもらために、町のお師匠様に読み書き学問を習いに行くことになりました。それから、捨てはお絹のお供として毎日町に行くことになりました。

家で朝から晩まで荒仕事をしているのに比べれば、お絹のお供で町のお師匠様の所に出かけるのは楽しくて、楽しくて仕方がなかったようです。



お絹は、部屋で読み書きしている間は、捨ては廊下でまっていたましたが、捨てにも部屋からもれ聞こえてくるお師匠様のお話を熱心に聞いていました。そのうち、学問がおもしろいと思うようになりました。お絹の手習いの反故（ほご）になって捨てられた紙もそっと拾って懐に入れ、それを広げて一人で夜中に習字の読み書きの真似もしました。

お絹は物に飽きやすい、わがままな娘で、口紅やおしろい、髪型のことなどには熱心ですが学問の方は、すぐに飽きてしまい、お師匠様におさらいを言いつけられても、家に帰ると何もしないで、勉強道具を放り投げていました。捨てはその道具を片付けながら、今日聞いた事を頭の中で繰り返しておさらいしました。



お絹と捨てが十五になった時、この村の秋の収穫祭りに領主のお殿様がおいでになることになり、祭りの仕度はいつにも増して賑やかになっていました。そんなところにお城の役人が来て、『祭りの余興として、村中の娘達は殿様の前で歌詠みをするように』と、ふれました。さあ、このことで村の中は一騒動です。





手踊り上手、民謡自慢の娘達だと居るが、歌詠む娘はそんなに居ない。ただ一人、お絹の母親は『しめた』と思いました。娘を町のお師匠様の所へ通わせて、読み書き手習い一通りの事はやらせた。お師匠様は風流人で、歌や俳句を作れば、手直しもやってもらえる。これは、殿様の前で歌詠むのは、村中で家のお絹の他はいない。お殿様の目に止まって、お城にあがるようになったりすれば大変な出世だと思い、わくわくしました。

さあ、いよいよ祭りの日が来ました。この日は見ごとな秋晴れのいい天気で、お城の殿様も大勢の家来やお女中衆を連れて村祭りの見学にきました。村中は一段とウキウキとなり、お殿様ご一行に若い娘達の唄を聞かせたり、女性たちの踊りを見せたり、若者達の相撲を見せたりと、何もかも賑やかに盛り上がりました。



さて、ひととおり、終わったところで、殿様がそばにいる家来に声をかけました。家来はかしこまり退っていき、やがて大きなお盆の上に大皿を乗せ、その大皿に真っ白な塩を山盛りにし、その真ん中に松を立てたものを持ってきました。それが歌のお題でありました。



殿様が『これこれ、この村の娘共、誰かこれを題にして歌を詠むものはおらぬか?』と言いました。さあ、お絹の母親はこの時とばかり、娘の背中を突いて『絹、さあ、行け行け、さあ、詠め、詠め』と言いました。お絹はこの日とばかり華やかな着物を着ていました。しずしずとお殿様の前に出て、『こほん』と咳をしてから一首詠みました。



『お盆の上に皿がある 皿の上に塩がある 塩の上には松がある』と詠みました。それを聞いた殿様は『それでは歌にならん。誰でもっと良く詠む者はおらぬか』と言いました。

ずらっと居並ぶ村の娘の中にも殿様の前で歌詠んだものはお絹以外にはおらず、そのお絹の歌を『それでは歌にならん』といわれので、皆下向いて、シーンとなってしまいました。

殿様、だんだん不機嫌になってきました。それを見た家来が慌てて言いました。
『こらこら、誰かおらぬか、誰でもよいから一首詠め、詠む者はおらぬか、おらんのか』すると、娘達の列の端の方から、『あのう、本当にだれでもいいんですか？わたしでもいいんですか？』とみんなその声の方を見ると、汚れてはいるが、粗末な木綿の着物を着た娘がいました。

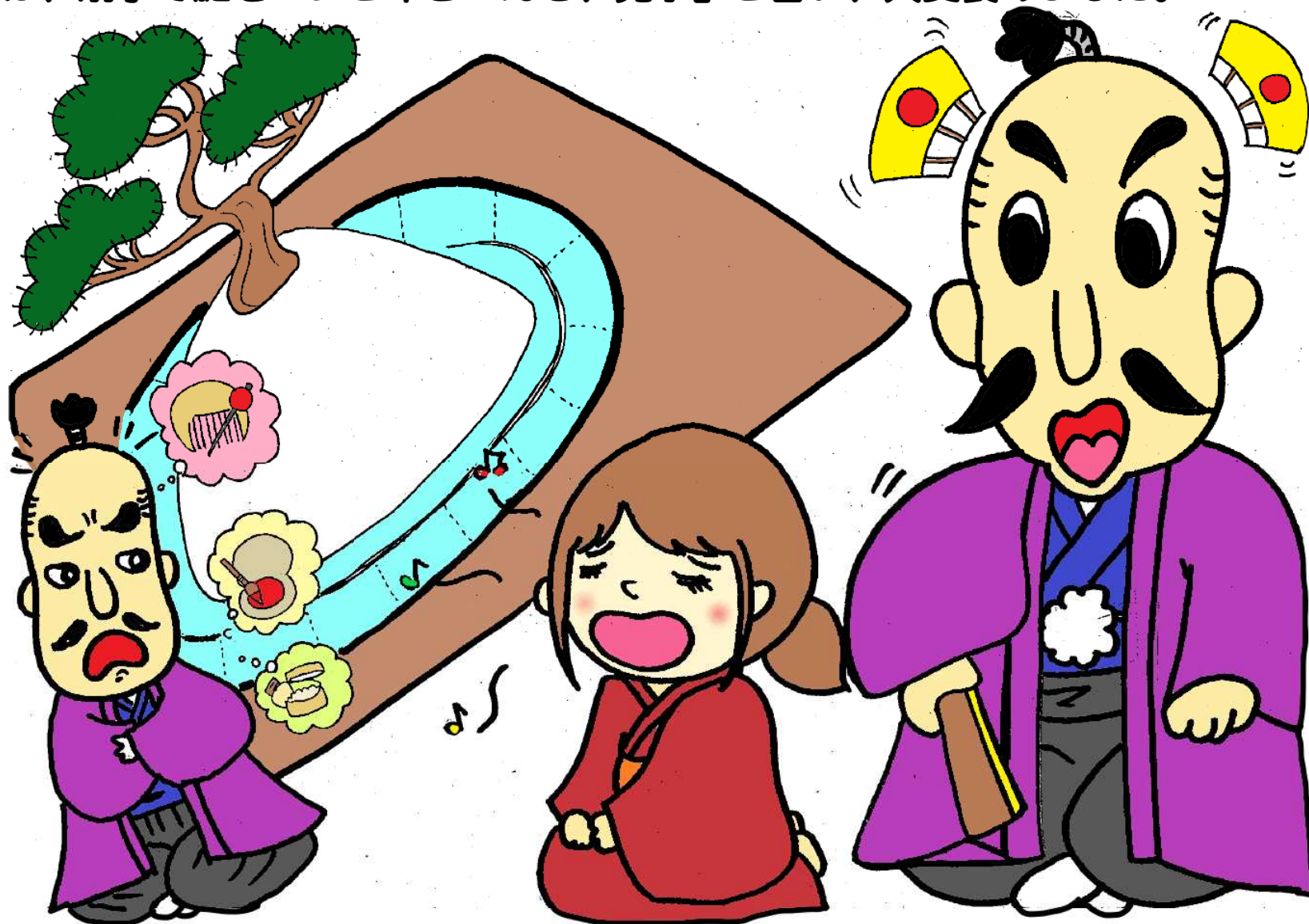


お絹の家の捨てでした。村の衆はそれを見てざわざわとなりましたが、ご家来がホットしたように『おっ、誰でも良い、誰でも良い、お前は歌が詠めるのか？ではここに参って、一首詠んでみよ』と言いました。

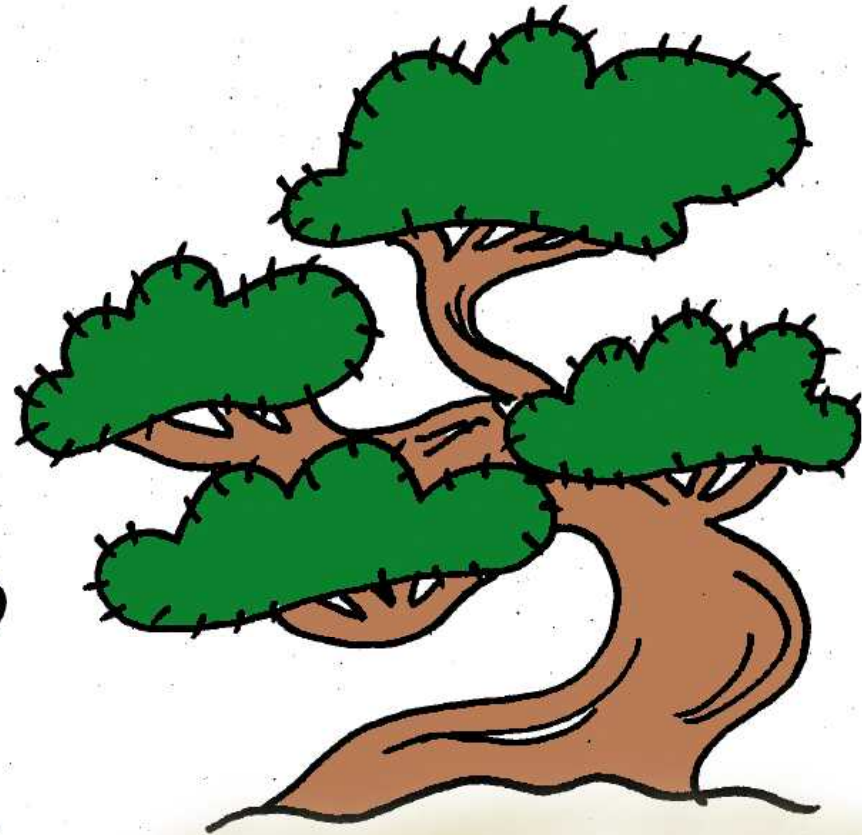
捨ては恐る恐る皆の前に出て、皿の塩の前に座りました。機嫌が悪くなりかけているお殿様は捨てを見て、見れば目鼻立ちいい娘だけれど、着ているものは粗末で、祭りだというのに、櫛、かんざしも無く、おしろいもつけず、口紅もさしてない、そんな娘が歌を詠むというので、殿様は大変興味深く思い、『お前が一首詠むと申すか？よしよし、では遠慮無く詠んでみよ』と言いました。

そこで、捨ては目をつむりフーと一息吐いてから、詠みました。

『さらさらとさら（皿）につもれる雪の山 雪を根にして 育（はぐくむ）む松かな』それを聞いたお殿様は、扇子で腿をバンと叩き『んむ、見事』と言い、大変褒めました。



殿様はこの捨てをすっかり気に入って、お城につれて戻りました。お城では殿様が粗末な村娘に歌を詠ませ、その娘を連れて戻った事が奥方様の耳に入り、奥方様も珍しがって出てきて、縁側に座って庭でかしまっている田舎娘に『この庭の木を題にして、一首詠んでみよ』と言いました。



捨てはしばらく考えてから、『村里に踏み捨てられし松ぼくりー末はめでたき 松のその色ー』と詠みました。奥方様はよろこんで、『捨てという名はよろしゅうない。これからはお松と名乗るが良い』と言いました。

それからお松はお姫様のお相手として、歌ばかりでなく、行儀作法も学ばせ、お茶、華も薙刀なども稽古させ、やがて昔の村娘捨てはお松様と呼ばれる立派なご身分になったそうです。



みんなも……
何でも機会があったら逃さずに勉強おくべきですよ。それは人生で、いつかきっと役に立つことがあるからね。おしまい